

桃李滿天下

——渡辺守邦先生へ——

矢野 洋子

守邦先生、御退職の年に開かれた歴代のゼミ生大集合の最後のゼミ会から十五年が経ちました。先生はそれぞれの代を振り返って、お話しくださいました。「この代とはなんだか飲んでばかりでした」というのが九六年度卒の私達へのお言葉でした。

コロナ禍に入る少し前、同期のゼミ生で集まりました。卒業二十周年には先生を囲んで盛大にと考えていました。先生はきつと「皆さんでどうぞ」などとおっしゃるでしょうが、なんとしてもらっていたきたいと語り合いなが

矢野 洋子
小松 亜希子
松原 哲子

ら、その日は解散したのでした。

私達と守邦先生との出会いは、大学一年の国文学概論です。毎回授業開始直後に行く小テストのみで評価されるため、遅刻の多かった私は日野の坂を駆け上がり、その頃教室では年間累計最高得点の六割未満は不合格という基準に同期達は緊張感で一杯だったと言います。思い出すのは『返品のない月曜日』。この本の入手が宿題でしたが、実は簡単に手に入らない本。かつてあんなに本屋を巡った日はありません。右往左往する私達を先生は楽しそうに眺め、そんな顛末はこの本の作者にも届きました。

大学三年の授業は『鎌倉物語』の演習で、担当した場所

を実際に見ることが必要でした。遠くはないけれど日常的ではない鎌倉への小旅行に私達はわくわくし、江戸のガイブックを片手に出掛けたのでした。しかしながら、私の担当した霊山ヶ崎は地元の人に聞くとママシが出る危ない場所ということで、周辺の写真を撮って発表に臨み、ママシの言い訳に先生は「本当ですか、ほうほうほう」と怪訝な顔をされていました。実地調査のできなかった私ですが、先生に文献調査できる課題をいただき、図書館で古辞書をいくつも見比べたり、他大学の図書館へ閲覧に行ったり、さらに先生の御蔵書の和本『日蓮聖人註画讃』を貸していただいたりもしました。四年生で守邦ゼミに入った同期はこの授業を履修した人が多く、先生のおかげで学びへの真摯な姿勢と学術的な世界の魅力を知ったのでした。

この授業と時を同じくして参加したのが寛永寺天海版一切経の古活字調査です。数年続くこの調査は活字の煤払いから始まり、紺色の酒屋の前掛け姿で調査の指揮をする先生に、教室にいる先生とは違う謹厳な研究者の顔を見たのでした。お昼にはキジ井やソースカツ井を召し上がりながら楽しそうに笑ういつもの先生に戻っているのですが、一介の学生である私達にも未来の文化財に触れる機会をください、調査員の末端として扱ってくださいことはやはり先生としてのお顔だったのだと思います。

そして私達は四年生になり、守邦ゼミを選択します。先生の研究室はいつも扉が開け放たれていて、私達はいつでもその誠実な御指導を受けることができました。ゼミの思い出は尽きませんが、皆が等しく思い出すのは箱根のゼミ合宿です。準備が終わらず車中で資料を切り貼りしたり、レジメの印刷に道中コピー機を探し回ったり、発表では言葉につまったり、緊張で声が出なくなったりと四苦八苦しながらの一日もそれぞれが苦い気持ちとともに記憶にありますが、楽しく思い出すのは箱根の旧街道を先生と一緒に歩いたことです。足元の悪い山道を猛烈な早足で歩く先生は、重たい鞆を肩に掛け、猫背で軽快に日野の坂を上る健脚振りを発揮し、私達は悲鳴を上げながらついていったのでした。夜の宴では先生を取り囲む私達に、「なによー」とおちよぽ口でおっしゃいましたが、嬉しそうな瞳を私達は忘れません。

先生と過ごした日々は私達の宝物です。お昼御飯を買いに自転車疾走する先生も、教卓の裏で椅子の端っこにちょこんと腰掛ける先生も私達は覚えていきます。卒業後、同期のゼミ会を何度か開き、その度に次こそ先生は来てくださるかしらと思っていました。コロナ禍直前のお正月には、大学院時代の仲間と共に先生のお宅を訪問しました。玄関先にお土産を置く旨を電話で一報して帰ろうとする

と、先生は飛んで出てきてくださり、これが私が先生にお会いできた最後でした。近々ゼミ会を開くのでぜひいらしてくださいと告げると、相変わらず色よい返事をくださらない先生でした。でも、またお会いできると信じていました。こんなにも突然お別れの時が来るなんて予想だにしていまませんでした。

先生。先生。またゼミ会を開きます。まだ先生の御返事をいただいています。次はきつと、御出席ですよ。

(やの ようこ・平成十年度修士課程修了・

豊島学院高等学校教諭)

小松 亜希子

十二月も近づき冬のおとずれを感じるようになった日。会社からの帰宅の途、渡辺守邦先生が御逝去されたご連絡を受けました。

私は大学一年の国文学概論の授業から修士課程修了までの六年間、いわば純粹培養の教え子として御指導を賜りました。気ままに過ごした修士の二年間で先生の御指導の下で修士論文を成した後、一般企業に就職しました。エンターテインメント・サービスクラス系の職種に従事しており、研究とは離れた世界で生活していますが、守邦先生の下で一緒

に過ごした上級生方と、今でも変わらずお付き合いさせていただいています。

その御縁で、実践女子大が開催校や事務局を務める学会や催しに際して、お手伝いをする機会に恵まれることがあります。守邦先生への御恩返しに少しでもなれば、という思いもありお伺いしています。

そんな私の様子を、先生が御退職されて後、お仲間の一人在近世文学会でお目に掛かった際に報告したところ、先生は、私の母校との関わりや社会人としての暮らしぶりに対して、「自分が教員として関わった学生が、社会に出て、社会が仕事を引き継ぎ、彼女をさらに育ててくれた。教師冥利に尽きる」と感慨深げにお話していた、と教えてくださいました。私のどこの部分をそうおっしゃったのか、當時も今も分かりません。ですが、物怖じせず自分のことや研究の進捗状況があるがままに話す私に、先生はどんな時も「ほー、ほー」と少し呆れた様子で、でもまずは最後まで話を聞いてくださったこと、失敗を気にすることなく研究や様々なことに挑戦させてくださったことは、今の自身のあり方の基礎を作り、御指導賜った数々の「守邦先生イズム」は私の中に息づいています。

御退職後、何人かの先生から「『実践国文学』への御寄稿はあるが、守邦先生の姿が確認できない」という言葉を

掛けていただくことが続きました。教え子としては、先生が事あるごとにおっしゃっていた、物事を確認する条件である「仮説・検証・結論」を実践するのは「今だ!」とばかりに、何人かの上級生とお住まいのある小江戸川越へ、年始の御挨拶を兼ねて実地調査(検証)に行きました。大晦日に年末の御挨拶でお電話をし、一月二日にお目に掛かれなくても、川越訪問を予定している旨をお伝えしました。当日午後、住所を頼りに辿り着いた玄関には、見覚えのある文字で郵便物の受け取り場所が示されていました。日野銘菓「高幡まんじゅう」を指定場所に置き電話を入れると、寒い中外まで出てきてくださり、お話しすることができました。心配されていた先生方にお元氣であることを御報告し、都度安堵の声を受け取ったものです。

実は今年一月、御宅の近所のカフェでZOOMをつないで、五分でもいらしていただけたら、先生を心配なさるOGも皆喜ぶだろうと企画していました。ロケハンも行い、いざ、先生にお声がけするぞ、という段になった直後の計報でした。本当に残念でなりません。

研究には厳しくも、普段は「いやよー」とおっしゃりながら、どんなことも寛容に受け入れてくださる先生のお姿が思い出されます。表に立つのも、祭り上げられるのも、あまり好まない先生で(学部生へゼミ紹介の発表をする際

も、代理で立たせていただいた記憶が今、よみがえってまいました)、この寄稿も意に添わないのではと憂慮するところではありますが、物怖じしない私を許してくださいだした先生のことですから、「まあ!」と言いながら御自分の頭をべしべし叩き、「僕はあ悪い男だねえ」と舌を出して笑ってくださいると信じています。

これからも守邦先生が繋いでくださった御縁に感謝し、あまり心配をかけないよう、気ままに過ごしていきたいと思えます。

先生、いつまでも見守っていてくださいね。

(こまつ あきこ)・平成十二年度修士課程修了)

松原 哲子

私が古典籍の原本調査を初体験したのは大学三年の守邦先生の演習授業でした。内容は、尾形叡氏の「おくのほそ道注解」に示された資料を可能な限り影印で探し、そのコピーを貼付したレジメを作成、論文を全文正確に音読した上で、引用された資料を現代語訳し、それが論文に引かれる意味を自分の言葉で説明してみせる、といったものでした。専門家が見た資料を自分でも見られる、場合によっては芭蕉が創作時に利用したものかもしれない、という

状況は私を高揚させ、大学図書館の書籍やマイクロフィルムをチェックし、国文学研究資料館に何度も通って紙焼きを手に入れ、コピーを切り貼りする作業に夢中になりました。同時並行で受講していたお隣の先生の演習も、柳亭種彦が見たとおぼしき資料を辿るという、これまた収集欲をくすぐる内容で、真つ当な学術上の意味も分からないのに、これこそが自分が大学生活に望んだことだと確信に至ったものです。

スタンブラリーよろしく、切り貼りを完成させることを目指す私に立ちほだかったのが、尾形氏の引用書目『唐詩訓解』でした。日本で刊行されたものの内容は漢籍で、他の本と同じ手順を踏んでも出てきません。「山岸文庫（実践女子大のコレクション）にあるような本よ」と先生に教わったものの、見当たらず、最終手段の図書館レファレンスに。結果、静嘉堂文庫に所蔵されているので閲覧の手続きをしましょう、と提案を受けました。何だか大ごとだと感じた私は、急ぎ先生を訪ね、その旨を報告したところ、予想以上に慌てた先生が図書館に内線連絡、対応の早い司書さんが今し方先方に連絡してしまった、とのこと。さらに慌てた先生は静嘉堂に断りの電話を入れるとおっしゃいました。何やら電話でお話しする先生の隣で、そわそわしながら待つこと十分か十五分、受話器を下ろした先生は、

「先方の御厚意で、あなたを調査に行かせることになりました。」とおっしゃり、後日、昼食とハンドタオルを持って研究室に来るよう指示なさいました。数日後、二人でお昼を食べた後、最初にハンドタオルを手に洗面所の場所をお尋ねし、石鹸で手を洗ってから資料に触ること、本を持ち上げたまま開いてはいけないこと、手擦れの少ない部分はどこか観察し、丁寧にページをめくることなどを一通り手ほどきくださり、苦い顔でなんにも知らないおばかさんを送り出してくださいました。

翌年、私は研究テーマ等の理由からお隣の先生の指導の下で卒業論文を提出し、その後、修士論文の提出までの二年間、守邦先生の御指導を賜る機会を得ました。原本調査のレクチャーの時と同様に、丁寧に順当な手順を踏むことが仕事の確かさを示し、研究成果に対する信用の獲得に繋がるということ、具体的に教えていただきました。

様々御指導賜ったことの中で、何よりも強く印象に残るのは、既存の常識について鵜呑みにせずに、絶えず問いかけていくことの大切さです。「あなたが今当たり前に踏まえている研究上の前提は、誰が、いつ、どんなかたちで示したもので、現状広く認められていることなのか。」「あなたはそれが正しいと証明できるのか。」と、何度も何度も問われました。大学院進学後、言わば里子として預かって

いただいた私への再教育なのかと、内心戸惑うこともあり
ました。でも、先行研究の成果を無批判に受け入れ、その
上に新たな研究を重ねてしまうことの危うさを知るにつ
け、先達が示した研究上の定義づけや、結論を出した自分
の仕事について、折に触れて再検証する意味や必要性を理
解するようになりました。研究を進めるのに欲しいデータ
ベースが無いなら、そう思った人間が自分で作ることに、論
文による作品紹介は自分の研究を支える資料を対象とし、
公開の意図が伝わるものとするに、どれも基本的なこと
で、色々な先生方から教えていただいたことと重なります
が、最初ががちりと私にも分かるように説いてくださっ
たのは守邦先生です。

「ゼミ生みたいな顔をして」と、毎年のゼミ会で私にしつ
しつと手を振った先生の笑顔を、もう拝見できないのは寂
しくなりません。これからも御意向を無視し、教え子だ
と名乗ります。「何を言っとるか」と夢枕で窘めてください。

(まつばら のりこ・平成十四年度博士後期課程

単位取得満期退学 博士(文学)

国文学研究資料館機関研究員・

実践女子大学非常勤講師)